

肥前町発、映画・書籍になった『にあんちゃん』

～感動を呼んだ10歳の少女の日記～

安本末子（昭和18年生まれ）は3歳で母を、9歳で父をなくしました。日記は昭和28年1月、父の四十九日の日から始まっています。10歳上の兄、喜一が臨時鉱夫として兄妹4人のどんぞこの生活を支えましたが、合理化でクビきりにあい、他の地に働きに行きます。姉吉子も唐津へ奉公に行き、「にあんちゃん」の高一と末子は知人のところを転々として暮らしました。

10歳の少女の日記はベストセラーになり、今村昌平監督のメガホンで映画化されました。（長門裕之、松尾嘉代、吉行和子、北林谷栄、殿山泰司などが出演）

安本末子は6年間、入野小学校で勉強し、入野中学校（今の肥前中学校）に1年生まで通いました。小学生の末子さんは、貧しくてつらい生活しながらこの日記を書き続けました。小学校3年生から5年生まで、それから中学1年生のときに書かれた日記です。

末子さんの家族は、父、母、兄、姉、2番目の兄、末子さんの6人で「にあんちゃん」というのは、2番目の兄のことです。

兄弟は日本で生まれたのですが、安本さんのふるさは朝鮮全羅南道宝城郡で、現在の韓国です。家族が生活していたのは、「大鶴炭鉱」のある佐賀県入野村鶴牧です。（今は、唐津市肥前町鶴牧です。）「大鶴炭鉱」は、多いときには家族も含めて4,000人の人が暮らしていたそうです。病院や店も多があり、入野小学校の分校（大鶴分校）もありました。父はここで、石炭を掘る仕事をしていたのですが、臨時雇いだったので、決して豊かな生活ではなかったはずですが、でも、貧しくても家族みんな暮らしていたときは、きっと幸せだったでしょう。

■日記の一部

昭和28年<4月13日>

（くつがぬすまれる事件があって）

まもなく、くつどろぼうはつかまって、つれられてきました。ふたりでした。ひとりは、4年2組の人で、もうひとりは、5年生の人でした。ふたりとも、うなだれてないいました。

とるときも、びくびくとふるえながらとったことでしょう。その上、見つかってつかまったときのころは、どんなにこわかったことでしょう。私は、かわいそうてたまりませんでした。

末子さんは、靴をぬすんだ人をにくむのではなく、なぜ、靴を盗まなければならなかったのか考えたのでしょ。家が金持ちで、靴くらい、いつでも買ってもらえるのだったら、ぬすむ必要はないのです。貧しい生活をしている、くつどろぼうのことを考えたのでしょ。

◎エピソード・伝承・うんちく など

■杵島炭鉱大鶴鉱業所について

- 昭和11年 入野村大鶴の香春炭鉱は杵島炭鉱に買収される。日支事変、太平洋戦争中、国策に従い朝鮮の人達を大勢移動せしめ、石炭の増産に取り組む。
- 昭和20年 終戦により朝鮮労働者は一部を残して帰朝、労働者不足で採炭不能となるが引揚げ者などで操業再開。
- 昭和23年～ 好景気。
- 昭和27年～ 合理化に入り、ストが行われる。
- 昭和28年 退職者が増え、採炭不能。
- 昭和31年 大鶴鉱業所は政府買い上げ。12月に閉山。

分野 文化

地域 肥前

◎地図・写真・統計資料など



映画「にあんちゃん」ポスター



（入野小学校HPより）

◎引用・参考文献（出典）

◆入野小学校HP ほか

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html